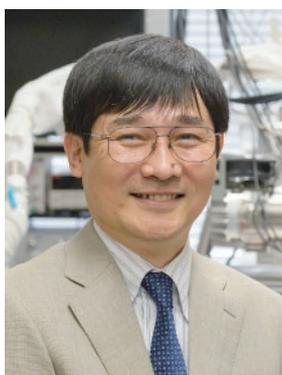


中嶋 敦 慶應義塾大学理工学部 教授

## ポストコロナに向けて元気な分子研



なかじま・あつし

1984年 東京大学理学部化学科卒業、1989年 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、理学博士。1989年 慶應義塾大学理工学部助手、1994年 同専任講師、1997年 同助教授、2001年 同教授、現在に至る。

この間、2005年-2009年 分子科学研究所 学会等連絡会議委員、2006年-2010年 分子科学研究所 運営会議委員、2013年-2015年 分子科学研究所 学会等連絡会議委員、2017年4月から現在 分子科学研究所 研究顧問。

2006年-現在 日本学術会議 連携会員、2009年-2012年 独立行政法人日本学術振興会 学術システム研究センター専門研究員、2009年-2014年 JST-ERATO「中嶋ナノクラスター集積制御」研究総括、2014-2018年 慶應義塾基礎科学・基盤工学インスティテュート主任研究員、2020年フンボルト賞、2021年 京都大学客員教授（化学研究所）。

私はバスに乗るのが好きである。バスと言っても、高速バスではなく、街の中を走る公共交通機関のバスである。高校が鉄道の最寄駅から遠い立地であったことから、私はバス通学であったが、何ら通学は苦痛ではなかった。バスが好きな理由は、街の中をゆっくり歩くことによるもので、市電でも構わない。少年時代に画才もないのに、お絵描き教室に通ったのも、当時の京都市内の市電に乗れるからだったような気がする。国内外を問わず、どの街に行っても、バスや市電、トラムはないかと探しては、一律料金を良いことに終点まで乗って、戻ってくる。海外の多くの街では、料金は時間制なので1回のバス代で往復もでき、しかも土地勘が得られる魅力が素敵である。

そのような私が、慶應義塾大学理工学部化学科に職を得て、茅幸二教授（分子科学研究所元所長（2000年4月から2004年3月））の研究室で働き始

めた時、流行の研究テーマを追いかけた時、という意味として「動き出したバスに慌てて乗るな」という方針を聞かされた。バス好きの私には何となく残念な響きであった。言わんとするところは、バスに相当する注目されるテーマを研究していると充実感はあるけれども、当人が何を達成したのかが希薄にならざるを得ない、という意味である。言い換えれば、創造的な研究はバスに乗ることでは進まない、という趣意であり、効率を求めるとは独創性は育たない、との意味にも通ずる。私は仕方なく、ラッシュの時の混雑したバスの中の居心地の悪さを想像に加えて研究者の道を歩み始めた。

この慶應義塾の化学科は半講座相当を単位とする構成で、中堅あるいはシニアと若手の教員1名ずつで研究室を運営しており、分子科学研究所（以下、分子研）とはとても深い関係がある。1981年に工学部を理工学部へ改組す

るにあたって化学科が新たに設置され、物理化学、理論化学の研究室に着任した4名の教員（茅、岩田、富宅、大峯（敬称略））は、その後、慶應義塾を経ていずれも分子研で職位を得ている。したがって、私も頑張って優れた研究成果を出して分子研に栄転する、そのような暗黙の目標があった。しかし、何度か分子研研究会や岡崎コンファレンスには呼んで頂いたが、人事での縁はなく、結局、ぬくぬくと同じ所属で今日を迎えているのは、人事の流動化の時代に逆行しているようで、何とも腑甲斐ない感覚を覚える。

私が助手くらいまでの時期の分子研の印象は、研究を通じて得るものばかりで、各研究者の独創性がすばらしく、国際的にも認知された研究のエキスパートの総本山という印象であった。個々の研究者は、自分を信じて闘っている強さが備わっているように感じられ、研究分野と研究者の名前が、必要

十分条件の形で1対1に結びついていた。まさしく、バスに乗らない研究者の集団というところである。その後、私が研究ばかりでなく大学の運営にも多少なりとも従事する中、分子研の見方に共同利用研究機関としての位置づけが加わり、2017年からは現在の研究顧問というお役目を頂き、運営上の視点も含めて分子研を見ている。

分子研の人事制度の大きな特徴の1つが内部昇格を禁止していることである。研究の自由とそれを支援する優れた研究環境という長所をもちつつも、昇格という形では評価しない制度である。この規則によって、優れた人材が分子研の運営にも参画し続ける要素が乏しくなり、組織論としては厳しい規則である。私立大学である慶應義塾大学に身を置いてみると、愛校心に裏打ちされて組織への想いを熱くもつ教員、職員の存在は、運営上、とりわけ改革上、とても重要であると強く感じる。したがって、構成員の流動性には、創造研究に資する崇高な理念を具現化する意味合いが色濃くあると理解している。一方で内部昇格の禁止によって、分子研が全国の大学などへの優れた人材供給の源泉になっていることは間違いない。人的ネットワークが全国的に広がることによって、分子研への想いを機関外に広げることにつながっている。この分子研のあり方は、分子研ファンを全国に増やし、いざ鎌倉の精神に似た、いざ分子研、という愛着が、通奏低音のように湧き出でているように感じている。とはいっても、機関運営の多くは現職のスタッフに任されるものであり、限られたマン

パワーでどのように運営業務を最適化するかには、その苦勞の大きさが、特に分子研の教授陣に見え隠れする。運営上の負担を軽減できる所長付きのマネージャーの導入などを想起もしつつ、現状の分子研が組織論を含めたザ・分子研ということなのだ、と感じている。

分子研を含めて、国立の研究所の存在意義において、研究レベルの高さは絶対的に必要な基軸である。幸いなことに、分子研の研究の尖り方は、以前の印象と変わらないところが多い。現在の分子研の運営は、誠に僭越ながら、川合眞紀研究所長の卓越した指導力のもとで研究所内の現状を精確に把握しつつ、将来ビジョンを的確に立案して運営されているように映っている。これまでの歴代の研究所長のまいた種で育った研究人員や体制を基礎としつつ、生命創成探究センター、計算科学研究センター、UVSORなどの設置や高度化、さらに卓越教授制度などを含めて、研究の活性化がうまく図られている。理論と実験の連携研究の創出やナノ科学分野の新分野への取り組みは力強い。これは決して、研究顧問によるお手盛りでなく、新型コロナCOVID-19禍直前の2019年末に行われた国際的研究者8名による諮問でも、高い評価を受けている。我が国の全体の国際学術論文の指標が低下している中にも、分子研からの国際学術論文の公表は活発で、また、その質は極めて高い。以前と同様に、若手研究者の研究活動は極めて高く、優れた研究者が育成されて、当該分野の中核研究者として全国の大学や研究所に輩出されており、この姿は、私がこれまでもっ

ていた印象と同じで、分子研が我が国の研究基盤に人材供給しているという点で大きく貢献し続けている。

研究顧問という立場になると、分子研内のすべての研究成果や提案を、所長と一緒に毎年1回、聞く機会を頂ける。年度ごとの素晴らしい所内の研究成果に触れられる。その一方で、人材が分子研から輩出されるために、画期的と思われる研究発表が、翌年には聞けなくなる寂しさがつきまとう。ただ、新たに着任した研究者の提案が、また、その気持ちをより以上に熱い気持ちにさせてくれることは、分子研の人事制度の健全さを示している。私が感心するのは、分子研スタッフの明るさで、以前よりも元気に活動しているように感じる点である。

このような研究顧問として分子研とかわりをもつ前の2007年頃、西川恵子先生を初代会長とする分子科学会の設立時に、学会運営の中で分子研にお世話になったことにも触れておきたい。当時の中村宏樹所長や小杉信博教授に、運営上のいろいろと温かなご配慮を頂き、また、その温かさは現在も引き継がれていることに感謝したい。ただ、私が委員長を務めていた分子科学研究会との連携で、伝統ある分子構造総合討論会の運営委員としてご尽力を頂いていた分子研OBでもある関一彦先生（名古屋大、当時）が2008年に逝去されてしまわれたことは、分子科学の研究領域にとっても、分子科学会にとっても大きな喪失であった。ここに改めて関先生のご冥福をお祈りしたい。

今は新型コロナ禍にある。分子研も

世界の大学、研究機関と同様に、研究交流のための会合の開催や国際交流は制約を強く受けている。島国の日本においては、欧米諸国がしたたかに研究推進を図っている中では、このコロナ禍の克服が早急に達成されることが望まれる。特に、創造研究を一層尖らすためには、海外に時々は出かけて、いろいろな研究者と語らうことは、特に大事にすべき機会である。異国での出会いや多様な研究者とのディスカッションは、他国で孤軍奮闘している研究者の存在を知る機会にもなり、闘う気持ちを増してくれる。その上、海外出張には、旅行と同じ心がリセットされる要素のおまけがついてくるので、新たな気づきや発想の転換をもたらし、心の疲れをも癒してくれる絶好の機会である。

一見、オンライン国際会議で国際交流はできるように思うが、オンラインではもともと知り合いであった人との交流は深められるが、新しい出会いはなかなか難しい。大学の新生がオンライン講義では仲間が増えないと嘆くことと同じである。現在、海外出張の大事な要素は相当抑えられてしまっている。世界各国で国際交流や海外出張が抑えられている中では、分子研の研究者がじっくり研究を進める時間を増やして、ポストコロナに備えて創造研究をさらに先導して頂きたい。そして、1日も早く現在の新型コロナの感染拡大を克服して、研究者が知的で質の高い刺激を受けることによって、学術が健全に進展することを願っている。

新型コロナ禍の前から、分子研では若手研究者の育成の視点から、アジア

の地域の研究ハブともいえる活動への取り組みが、国際交流協定に基づくインターンシップなどとして始まっていた。若手研究者の育成は、今後、分子研が充実を図るべき課題でもあり、岡崎コンファレンスや分子研研究会の開催による国際交流とともに、国際性を一層充実させた共同利用機関として活動を十分に再開して頂ける時を心待ちにしている。ポストコロナの分子研は、2025年の50周年に向けて、その視界は良好である。そして、私は海外の街の景色を、一人、バスの車窓から楽しみたい。

